ウルチ(粳・粳米)の呼称についての歴史的考察

誌名	農業および園芸 = Agriculture and horticulture
ISSN	03695247
著者名	小川,正巳 猪谷,富雄
発行元	養賢堂
巻/号	87巻11号
掲載ページ	p. 1084-1089
発行年月	2012年11月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

ウルチ（粳・粳米）の呼称についての歴史的考察

小川正巳*・猪谷富雄*

〔キーワード〕：赤米，大唐米，キチゴメ（吉米），タダゴメ（只米），タダヨネ（唯米），ウルチ

Ⅰ．はじめに

稲や米に関する用語の呼称の異称や歴史的変遷などについて詳しく知ることはわが国の稲作史や稲作文化の一端を垣間見ることになる．われわれはすでに陸稲の呼称に関する歴史的考察を行った（小川・猪谷 2011）．本報告では粳の呼称について文献学的に調査をし，歴史的な考察を行ったものである．米（稲）には粳と糯があるが，本報は糯の呼称に比較してかなり複雑な粳の呼称に注目したものである．

Ⅱ．歴史的な考察

奈良時代の史料や平城京跡から出土する木簡にすでに粳・粳米と糯・糯米を記したものが数多くある．その多くは粳と糯米と記されている．この当時粳は訓読みでは何と読まれ，一般の呼称はどうであったのだろうか？（注 1）．そしてその後粳の読みはどう変遷し，あるいは粳の異称にはどんなものがあったのであろうか？

現在と同様に，古来多くの場合糯に対して粳は単に米と呼ばれた．しかし，粳を強調した場合の粳の読み方あるいは呼称については平安時代以降明らかで，次のとおりである．

わが国最古の本草書といわれる平安中期の『本草和名』（深根 10 世紀初め）は中国の書物に見られる約1,000種余りの薬物などの本草に万葉仮名で和名を付け，わが国の産地などを記した薬物辞典である．本書には粳（粳米，粳稲）の和名は“宇留之祢”とある．ほぼ同時期の漢和辞書『和名鈔』（源 931-938）にも粳は“秔　和名は宇留之祢”とある（注 2）．

室町中期の国語辞書『下学集』（著者不詳 1444）には糯とともに粳がある．また，室町時代頃の用語を集めた『日葡辞書』（日本イエズス会 1603-1604）には Come（コメ），Yone（ヨネ），Mochigome（モチゴメ）などとともに Vruxine（ウルシネ）が立項されている．

江戸時代に入ってからの粳の呼称を見てみよう．わが国最初の食物本草書の『包厨備用倭名本草』（向井 1684）には粳米はウルゴメ・ウルシネと訓むとある．また，江戸中期の『書言字考節用集』（槇島 1698）には秔および粳にそれぞれにウルシネ，ウルコメの振り仮名が付けられ，『大和本草』（貝原 1709）には“粘ラザル者ハ粳ト云ウ　又秔ト云ウ倭名ウルシネ”とある．同様に『和漢三才図会』（寺島 1712）にも粳（うるのこめ），秔（ウルシネ）とある（図 1）．なお，本書では米について粳以外に陳倉米，秈，糯を挙げ，解説している．

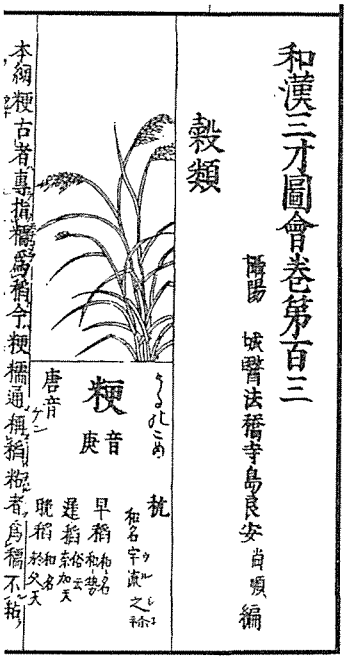

図 1　『和漢三才図会』（寺島 1712）から

*県立広島大学　生命環境学部（Masami Ogawa，Tomio Itani）

0369-5247/12/¥500/1 論文/JCOPY

江戸後期の『重訂本草綱目啓蒙』（小野 1847）では米を次のように3分類している．

稲　モチノヨネ和名鈔　モチヨネ　モチゴメ

粳　ウルシネ和名鈔　ウルゴメ　ウルノコメ　ウルチ江戸

秈　タイトウゴメ　トウボシ筑前　トウボウシ加州橘名

稲をイネと読めば現在使用されているように糯と粳であるが，古くは糯を意味していた（注3）．また，秈とはインディカの大唐米（太唐米）のことである．

さて，粳についてであるが江戸における新たな呼称としてここにウルチが現われる．江戸後期の彩色植物図鑑・本草書の『本草図譜』（岩崎 1828）にも同様に“粳米　うるしね和名鈔　うるち江戸”とあり，くまがへこぼれという品種などの図が載せてある．その後明治時代に入って出版された文部省編纂の一連の教科書にはウルチ（粳・粳米）とあり，例えば『博物図教授法』（松川 1877）には糯米とともに粳米とある．明治中期に出版された『日本大辞書』（山田 1892-1893）には“うるしね【粳稲】ウルチウルゴメ”とあり，現在ではこのウルチが標準用語あるいは専門用語として使用されている．

江戸後期に現われたウルチの語源については，ウルシネの略転すなわちまずシネ（稲）の語義が忘れられ，ウルシと下略され，さらにウルチと変化したと考えられる（小学館国語辞典編集部 2000-2002）．なお，ウルチのチとはモチのチに対応してウルに付けられたとの説もある（注4）．

稲以外に粟，黍にも粳と糯があることが知られ，それらの粳は粳粟（ウルアワ・ウルチアワ）そして粳黍（ウルキビ・ウルチキビ）と呼ばれてきた．上述の『重訂本草綱目啓蒙』にはウルアハ（粟）およびウルシキビ（稷）があり，それぞれ対語としてモチアハ（秫）およびモチキビ（黍）がある．なお，粟に関しては古く平安中期の『和名鈔』（源 931－938）にすでに粱米（アハノウルシネ）があり，平安末期の漢和辞書『類聚名義抄』（著者不詳 平安末期）にも粳・粳米・粃・秔・粃・粃・粃米のウルシネ以外に粱米（アハノウルシネ）および白粱米（アハノシロウルシネ）などがある．

Ⅲ．方言からの考察

国立国語研究所は昭和30年代（1957-1965年）に全国の方言分布の調査を行った．285の調査項目の一つにうるち（粳，粳米）があり，その調査結果から作成された粳の言語地図が図2である（国立国語研究所 1970，尚学図書 1989）．約半世紀前の調査であることを前提にして以下論を進める．

ウルチをはじめとして10種のウル系の呼称が全国各地で採録されている．長い歴史を持つウル系の用語が各地で使用されていることが分かるが，ここでは興味ある2点についてだけ記し，それ以上のウル系用語の地域分布については複雑なため詳しく記述することは省略する．まず，ウルチの呼称は意外にも関東地方およびその周辺地域だけである．このことは上述したようにウルチは江戸時代に江戸で発生した呼称であることと密接に関連していると考えられる．また，岐阜県南部のウルシネは上述のように平安期まで遡れる古名であり，静岡県，愛知県そして九州北半分の広範囲におよぶウルシはウルシネに由来する名称であろう．

次にウル系以外の数点の呼称について，『日本言語地図』（国立国語研究所 1970）の付録の解説を基にして出来るだけ簡潔に記してみたい．

まず，高知・徳島のキチ・キチゴメについてである．この地域における粳の地方名であるキチ・キチゴメの由来についてはかなり明らかである．

キチ・キチゴメとは吉・吉米のことで，本来は“吉き米”に由来するものであろう．これは低品質米の対語で，中世以降の史料に散見される（注5）．特に土佐国では低品質米のインディカの太唐米（大唐米）に対する普通米（粳）として吉米の呼称が広く使用された．中世に渡来し，近世にかけて西日本を中心に栽培された赤米の太唐米は低品質米であったが，土佐国などでは極めて広範囲に栽培されていた（小川・猪谷 2008）．中世から近世にかけて土佐国にはそれに関する史料が数多く残されている．例えば，すでに15世紀の史料『大忍庄内検帳』（1422）には普通の粳稲を表す“吉”と太唐米

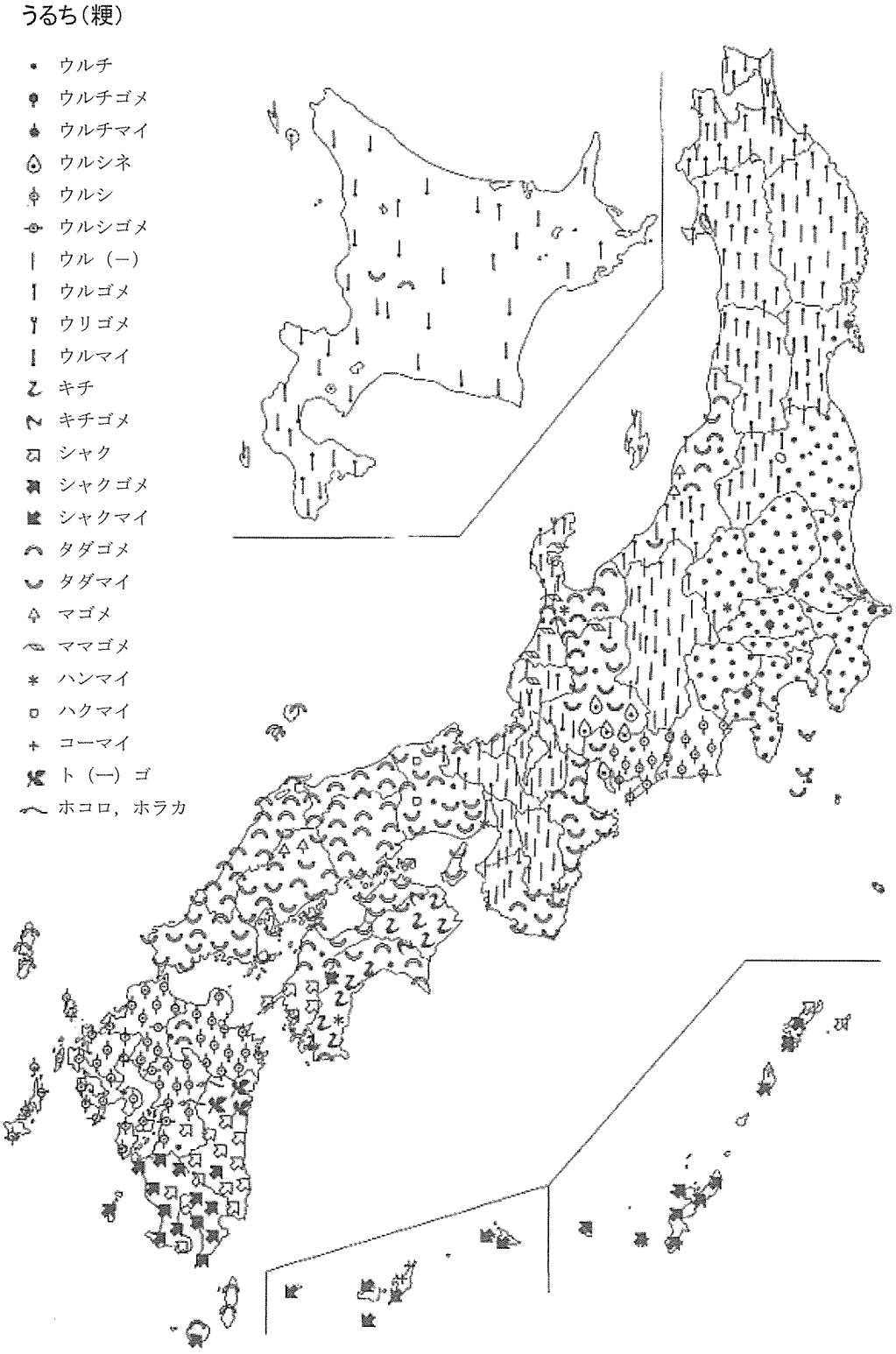

図2　粳(うるち)の方言地図（『日本方言大辞典』（尚学図書 1989）から）

を意味する“太”の記載がある．すなわち，そこには大忍庄の水田一筆ごとに面積と年貢高が記され，さらにそれぞれに“吉”と“太”が付記されている．“吉”と“太”の作付けは為政者によって管理されていた様子がうかがえるのである．その後戦国時代の大名長宗我部氏さらには関ヶ原合戦後の山内氏の支配下にあった土佐国などでは“吉（吉米・吉稲）”と“太（太米・太稲）”の呼称が並立して広く使用されていた（注6）．

低品質で安価な赤米の太唐米は不良田などで安定した収量を得ることができたが，江戸時代も半ば過ぎの頃から徐々に栽培が減少し，明治以降はほとんど栽培されなくなった．これは水田改良や栽培技術の向上などにより良質の普通米の栽培が広範囲に可能になったためである．

かつて土佐では太唐米が広く栽培されていたことを現在では高知県人でさえ知る人はほとんどいなくなり，タイ（太）・タイゴメ（太米）・タイマイ（太米）は死語となってしまった．他方，普通米である粳の別名としてキチ（吉）・キチゴメ（吉米）は現在でも高知や徳島県では依然として使用されているのである．

次に愛媛・鹿児島・宮崎・沖縄に見られるシャク・シャクゴメ・シャクマイについてであるが，この分布から南方系の用語であろうと考えられる．この地域における稲・米の渡来経路と関係があるのかもしれない．しかし，この系統の呼称の系譜については全く不明である．

次に西日本などに広範囲に見られるタダゴメ・タダマイについてである．これらの用語には長い歴史が知られている．

すでに平安時代の『穀類抄』（著者不詳 1156）や『本草和名』（深根 10世紀初め）にタタヨネがある．前者の『穀類抄』にはわが国最古の稲の図があり，そこには“稲米”とあり，“タヽヨネ”と振り仮名が付いてある（図3）．また，後者の『本草和名』には“稲米　〈略〉和名　多々与禰”とある．

『日本国語大辞典』（小学館国語辞典編集部 2000-2002）には“ただよね（唯米）　うるちのこと”とあり，中世の“タヽヨネ”と同一のものとしている．また，『日本方言大辞典』（尚学図書 1989）には“ただごめ（只米）　もち米に対して普通の米．うるち”とある．このように，タダゴメ・タダマイとはモチゴメ・モチマイに対する普通の米という意味である．

図3　『穀類抄』（著者不詳 1156）にみる稲の図

平安期のタダゴメ・タダマイの名称が現在の近畿周辺部から東は新潟，西は中国地方・四国の瀬戸内海沿岸そして対馬・種子島と広い範囲に方言として残っているのである．しかし，中・近世の史料に唯米や只米の用語はほとんど見当たらず，文章語ではなく口頭語であったのかもしれない（注7）．また，タダコメ・タダマイと他の方言，例えば近畿地方のウル系用語との歴史上の関連は複雑で，よく判らない（徳川 1979）．

唯米・只米に似た用語に凡米があり，古代より知られている．古くは藤原宮跡から出土した木簡の一つに美濃の本巣郡遠市郷からの貢納米に付けられた荷札木簡があり，“凡米五斗”とある（奈良文化財研究所 2012）．また，正倉院文書『奉写一切経所解』（771）には次のようにある．

米弐拾陸斛　廿五石凡米　一石糯米

すなわち，“米26石のうち25石は凡米，1石は糯米”の意で，凡米が粳を意味することは明らかである．この凡米がボンマイあるいはハンマイと読まれていたのかは明らかでないが，もしハンマイであるならば図2にある高知・兵庫・富山の粳の方言のハンマイとは飯米からでなく，凡米に起源する可能性がある．

Ⅳ．最後に

本報告に記述したように，粳には古来多くの呼称があり，現在に至っている．他方糯の呼称についてみると，古くからモチ，モチヨネあるいはモチゴメと呼ばれてきた（注8）．また，現代の全国の方言調査からもモチ系，モチノコメ系，モチコメ（モチゴメ）系などとほとんどがモチ関連の表現だけである（国立国語研究所 1970）．このように，粳には各地に方言として多くの種々の表現の呼称が残存しているのに対し，糯およびその製品の餅にモチ系以外の呼称がほとんどないことは非常に興味深い．

注1．平城京跡出土の木簡や正倉院文書などから，米（稲）の粳以外に古代に粳田・粳麻呂・粳万呂・粳虫女・粳虫売など粳の付く人名も多く使用されていたことが判る．

注2．西暦100年頃に成立した，中国最古の漢字の解説書『説文解字』には“粘るを稲，粘らざるを秔という”とある（諸橋 1958）．

注3．うるちを意味する漢字には粳，秔以外に秈，籼，粳，稌，糠などが知られている（諸橋 1958）．このうち秈（籼）はうるちではなく，既述したようにインディカの大唐米を指す場合もある．また，稌はモチゴメを指す用語として使用されることもある．

注4．ウルチの語源についての他説には，食味が良いという意のウルハシイネからの説（貝原 1699），サンスクリット語（梵語）の米を意味するウリヒ（vrihih）に由来するマレー語や台湾のアミ語などのブラス（bras）やブラチ（brats）からの転訛説（坪井 1927，新村 1930，大野 1961）などがある．なお，ウルチのウルとは“獲”すなわち収穫の多いの意との説（谷川 1777-1887，1898）あるいは“潤う”すなわち“米に光沢がある”の意との説（大槻 1982）もある．しかし，語源俗解というように，これらの語源説は現在では科学的根拠が薄いものと考えられている．

注5．古くは建仁2年（1202年）の九条家文書および応長元年（1311年）の大乗院文書に吉米の用語がある（竹内 1972，1986）．前者は摂津の輪田荘の年貢米に関する記録であるが，最粗悪米の対語に吉米があり（小川・猪谷 2012），後者は越前の河口荘における年貢米として舂吉米すなわち搗精した吉米がある．

注6．『長宗我部元親百箇条』ともいわれる『長宗我部掟書』（長曾我部盛親・元親 1597）には“太吉は地面の立毛に従うべし．但し太を吉地に作ることは堅く停止すべし．もしこの旨に背かば貢物は吉を収むべし．”とある．不良な水田に適した太唐米は低品質であったが多収のため良質の地すなわち吉地に作る農民がいたため，このような規定を定めたのである．

注7．幕末から明治期にかけて編纂・改訂された，わが国最初の和英辞典『和英語林集成』（Hepburn 1887）には，Urushine（ウルシネ，粳）の同義語にKOME（コメ）およびTADAGOME（タダゴメ）とある．近世にタダゴメが採り上げられている数少ない例である．

注8．平安中期の『和名鈔』には糯には粳の字が当てられ，和名は毛知乃與祢（モチノヨネ）とあり，他方糯から作った餅の和名は毛知比（モチヒ）とある．また，餅の別名にカチン・オカチンがあるが，これは室町時代に宮中で使われ始めた女房詞である．この語源は，餅を意味する古語“搗飯”が訛ったものといわれている．

滋賀県大津市田上里町に毛知比神社がある．言い伝えでは神社は天平宝字元年（757年）に造営され，その際に地元民が餅を搗いて献上したことに社名の由来があるという．ここにモチの古名のモチヒを見ることができる．なお，神社の御祭神は日本武尊と保食神である．

引用文献

深根輔仁 10世紀初め．本草和名（918年頃成立か）（覆刻日本古典全集19巻．2007．現代思潮新社）．

Hepburn, J. C. 1887．和英語林集成．日盛館．

奉写一切経所解 宝亀 2 年（771）．（東京大学史料編纂所 1982．大日本古文書 編年之 6．東京大学出版会．74頁）．

岩崎灌園 文政11年（1828）．本草図譜．

貝原益軒 元禄12年(1699)．日本釈名(益軒全集 巻之一．1910．益軒全集刊行部)．

貝原益軒 宝永6年(1709)．大和本草(益軒全集 巻之六．1911．益軒全集刊行部)．

国立国語研究所 編 1970．日本言語地図 第4集．および日本言語地図解説－各図の説明4－．国立国語研究所．

槇島昭武 元禄11年（1698）．書言字考節用集（中田祝夫・小林祥次郎 2006．改訂新版 書言字考節用集研究並びに索引．勉誠出版）．

松川半山 註解・書圖 1877．博物図教授法 第三．岡島宝寶堂．

源順 承平年間（931-938年）．和名鈔．
平安中期の漢和辞書．10巻本と20巻本とがある．漢語を意義分類し，出典を記して意味と解説を付し，字音と和訓を示す．和名抄，倭名鈔，和名類聚抄，倭名類聚鈔などともいう．〔京都大学文学部国語学国文学研究室 1968．諸本集成倭名類聚抄（本文編）．臨川書店〕．

諸橋轍次 1958．大漢和辞典 巻8．大修館書店．

向井元升 貞享元年（1684）．包厨備用倭名本草（吉井始子編 1980．食物本草本大成 第7巻．臨川書店）．

奈良文化財研究所 2012．木簡データベース．http://www.nabunken.go.jp/database/index.html.

日本イエズス会 慶長8-9年（1603-1604）．日葡辞書（土井忠生ら 1980．邦訳 日葡辞書．岩波書店）．

小川正巳・猪谷富雄 2008．赤米の博物誌．大学教育出版．

小川正巳・猪谷富雄 2011．わが国の陸稲の呼称に関する歴史的考察．生命環境学術誌 3：57-71．

小川正巳・猪谷富雄 2012．赤米こぼれ話〔その 14〕．農業および園芸 87：506-513．

小野蘭山 弘化4年（1847）．重訂本草綱目啓蒙〔本草綱目啓蒙（全4巻）1991-1992．平凡社〕．

大野 晋 1961．日本語の年輪．有紀書房．

大忍庄内検帳 応永 29 年（1422）．（近世村落研究会 編 1956．近世村落自治史料集 第2輯 土佐國地方史料．学術振興会）．

大槻文彦 1982．新編大言海．冨山房．

新村 出 1930．東亜語源志．岡書院．

小学館国語辞典編集部 編 2000-2002．日本国語大辞典（第二版）．小学館．

尚学図書 編 1989．日本方言大辞典（全3巻）．小学館．

竹内理三 編 1972．鎌倉遺文 古文書編3．文書番号1290．東京堂出版．pp.55-57．

竹内理三 編 1986．鎌倉遺文 古文書編32．文書番号24508．東京堂出版．pp.100-112．

谷川士清 編 安永6年（1777）-明治20年（1887）．和訓栞．

谷川士清 編 1898．増補語林倭訓栞（伴信友 校閲 井上頼圀・小杉榲邨 増補）．皇典講究所．

寺島良安 正徳2年（1712）．和漢三才図会（復刻本；和漢三才図会刊行委員会．1970．東京美術）．

徳川宗賢 編 1979．日本の方言地図．中央公論社．

坪井九馬三 1927．我が国民国語の曙．京文社．

長曾我部盛親・元親 慶長2年（1597）．長曾我部掟書（滝本誠一 編 1966．日本経済大典 第1巻．明治文献）．

著者不詳 保元元年（1156 年）．穀類抄〔武田科学振興財団杏雨書屋 編集 穀類抄(原本の影印と翻刻)．2004．武田科学振興財団出版〕．

著者不詳 平安末期．類聚名義抄．

著者不詳 文安元年（1444）．下学集〔東麓破衲 編・山脇道円（増補） 寛文9年（1669）．増補下学集〕．

山田美妙 1892-1893．日本大辞書．日本大辞書発行所．